

学校の怪談

# 妖怪テケテケ

第二稿

監督・小中和哉  
脚本・小中千昭

特殊造形・こぐま兄弟舎

93／12／15

登場人物

みき

後藤 美姫 (17) ..... 蹊城学園高校二年の美少女ノゲイム・マニア。ついでにワガママ。趣味はスト の乱入対戦。

田中 誠 (15) ..... 同一年ノトラウマ・プロ 主宰兼・監督。ティム・バートンを崇拜するも、資質はR・コーマン。

井手 啓人 (15) ..... 同ノ主演俳優。J・C・ヴァンダムが好きな肉体アクション主義者。得意技は後ろ回し蹴り。

中嶋 憲武 (15) ..... 同ノカメラマン。ホントはカウリスマキが好き。通称 ナカジ。一見ボーツとしてるが、実はそう。

千葉 晃一 (15) ..... 同ノニヒルな敵役を演じるが、別に映画好きではない。写真部所属のガン・ヲタク。

浅沼 恵司 (38) ..... 古文教師ノ都市伝説フィールド・ワーカーとして、地区の研究會に  
参画。

空手部のみなさま (4〜5名のイカつい男子生徒。高校生に見える  
ないガ体)

ストーリー・テラー教師

## 夕暮れの教室

あの、教師が、教壇脇の壁に何かプリントを画鋏で留めていた。

教師「——明治時代に、粘菌の研究なんかで活躍した、南方熊楠という人がいたの、御存知ですか？ アメリカやイギリスにも渡った、当時最高の学者でした。この人が面白い事、言ってます。（頭を横にして）幽霊を見た、って思った時、こういう状態でも、地面から真っ直ぐ立って見えたら、ホンモノ。頭とおんなし様に横になつて見えてたら、そりや目の錯覚。ま、極めて明快な答えではあるんですが（頭戻し）——オバケ見てもた時、いちいちそんな事気にしまつかいな……（ブツブツ）」

二年B組教室／午前

休み時間。談笑している生徒たち。

最後の席で、ガムを噛みながら『ログイン』を読んでいるのは——やや蔭のあるパーフェクトな美少女

・美姫

教室の入口で、四人の男子が見ていたが、意を決して美姫の前にやってくる。

井手「——あつ、あの、後藤美姫、さん」

美姫「？」

ナカジ「（見惚れてたら、つい）ぼつ、ぼくと付き合ってた——」

ナカジ、千葉らに襟首掴まれて背後へ。  
ズイと前が出る誠。

千葉「（オフ／ナカジに）ちがうだろっ！（スパンスパン叩き）」

誠「（愛想笑み）僕たち、1年の有志でビデオ映画作ってんですけど、出演して貰えませんか？」

美姫「——」

誠の愛想笑み、硬直。冷汗タラツ。

誠「（必死に）あの、そんな変な奴じゃなくて、あ、ちよつと変だけど。てゆっか、アクション物なんですよ。こい

つ（井手）が学園のヒーローで、学園侵略と闘つ——」

美 姫「（無愛想に）いーけど」

誠 「え？」

美 姫「別にヒマだし」

サツと顔を見合わせる、トラウマ・プロ の面々。

校庭の隅／翌日曜午前

ぼんやりと立っている美姫。革ジャケットにミニ、ブーツ  
姿（非ヘビメタ系）。ガムかみかみ。

三脚に据えた8mmビデオカメラを囲む四人。井手はポ  
ロボロの空手着を衣装として着ている。

美姫の立っている側の木の根本、朽ちた木片が数本、  
立っている。

井 手「（見ながら小声で）可憐な美少女つて設定じゃなかったの  
かよ」

千 葉「何で昨日、衣装、打ち合わせとかなかったのさ」

誠 「いんだよ！あれで（無理に納得） ちよつと不良娘がかつ  
てた方がリアリティあるつてもんだら。いくぞっ！」

井 手「（背後に）空手部のみなさん！」

4～5人の、イカつい男子（全員学生服）が出てくる。  
どう見ても二十歳過ぎのイカつい野郎ども。

ナカジ「この人たち、ホントにウチの生徒？」

千 葉「どうやって口説いたの？」

誠 「春の大会、ビデオで撮るつてバーターだよ。（空手軍に）  
じゃ、さっきの段取りでいきますから！」  
頷き、美姫を囲む様に立つ。

誠 「（気合）はい本番！」

ナカジ＋千葉「本番！」

ナカジ「カメラ回った！ 5秒前」

誠＋井手＋千葉「4、3、2——」

一瞬の静寂。

誠 「よい！ スターツ！」

空手軍、美姫の腕を掴み、連れていこうとする。

美姫、「えっ？えっ？」とされるがまま。

誠 「（ニタ）おお、リアルな芝居！」

と！ 井手が前に立ちはだかる。

空手A「何だてめえ！」

ナカジ、三脚を持ち上げてステディカムの様に周りこんでいく。追従する誠。

井手「彼女を離せ！」

空手A「ざけんじゃねえ！」

サツと三人が井手を取り囲む。

井手、目を左右に走らせて——キメ・ポーズ！

襲いかかる三人！

井手、機敏にかわして胸元に中キックをかませる！

空手軍、大袈裟にやられてくれる。

井手、自分でスローモーションのキック。

ヒマなもんで、脇でゲームボーイしている美姫

誠、手に汗握って演出。

大袈裟に敵のキックを受ける井手、美姫の側に吹っ飛び、木片をベキベキと押し倒す。

誠、『おしー！』

井手、美姫の腕をぼんやりと掴んでいた二人から美姫を奪還。美姫を背後に隠してキメ・ポーズ。

カメラを覗いていたナカジ、『？』

ファインダー内。折れた木片の辺り、何か黒い影が蠢いている。

誠 「カッターッ！」

ニコニコしながら脇のナカジを見る。と、ナカジとつ  
くにカメラを脇に降ろし、全然違う方をボーツと見て  
いる。誠、泣きそつな顔でカメラとナカジを交互に見  
る。

誠 「ナカジ……?」

廊下／視聴覚準備室前／翌日

休み時間、生徒たちが歩いている。

部屋の前に張紙。『トラウマ・プロダクション使用中。  
入るな』(結構前から貼つてあるらしく、黄ばんでる)

視聴覚室内

小会議室程の部屋。ビデオ機器がラックに積まれてい  
おり、その脇の壁には美姫の写真。盗み撮りらしく  
珍しく笑顔を見せている。

オフラインの編集機を囲んでいる四人。

真剣な面持ち。

モニターに、前シーンのラッシュが映っている。

井手が自分でやつてるスローモーション。

井手「これなあ、やつぱホントにスローモーションでやんねえと  
思いつきしまヌケだよなあ」

千葉「ならやんなきゃいいじゃねーか」

井手「ムッ」

誠「フィルムだったら出来んだけどな、そついう奴だつてさ」

千葉「早くバイトして、8mmカメラ買えよ」

誠「特撮やれる奴だったらZC1000だろ? 幾らすつと思つ  
て——」

ナカジ「あ、ここだ」

ナカジ、止めた映像の隅を指す。黒い影がぼんやり。

井手「え? 何?」

誠「——何だ? これ……」

影の中心、赤く目の様なものがぼんやり光っている。

S「妖怪テケテケ」

CM

1年C組教室／午後

授業中。生徒ら、真面目に教科書を読んでいる中――  
誠、手製のコンテ用紙に絵コンテを書いている。台上に縛りつけられている、制服姿の美姫の姿。構図は決まっているが、美姫の顔が気に入らず、書き直す。

同／放課後

窓外は夕暮れ。

3個程のレフランプが室内を照らしている。  
寄せられた机の上に縛りつけられている美姫、ガムをかみかみ。

千葉「（誠に小声で）おい誠、ゴトミキ、機嫌悪そーだぞ」

誠「（美姫に）すいません。すぐやりますから」

美姫「べつにいーけどお」

誠「（見惚れてる）美しい……。 （ハッ）井手、いくぞ！はい本番！」

全員「本番！」

井手とナカジ、廊下へ出ていく。

美姫、オデコがかゆくなり、無理やり左手を外してポリポリ。

ナカジ「（オフ）カメラ回った！ 5秒前！」

美姫、サッと左手を戻す。

全員「4、3、2――」

ピンポン！ 拡声器が鳴る。

教師の声「はい下校時刻！ 残ってる生徒は全員帰りなさい！」

全員「だーっ！」

誠「おしっ！ このカットだけ撮っちゃうぞー！」

誠 「(オフ)スターツ二」

縛られている美姫のもとへ駆けつける井手。

井手 「大丈夫か二」

美姫 「来ちゃ駄目！ これは罠なんだから(棒読み)」

美姫のロープを解き始める井手。と！

千葉 「(オフ)俺の言う事が聞けない奴は、殺す！」

キツと見る井手。

教室の隅にバツクライトで立つ千葉！ 不敵な笑み。

---

千葉に向かってトラック・アップしていたナカジ、コケる。

ナカジ 「てッ！」

一同 「(ガックリ)ナーカージー」

千葉、不満そうに内ポケットから小振りなワルサーを出して愛撫。

誠 「千葉！ 今回の作品はピストル使わないって言ったろ二」

千葉 「(劇中口調)こいつあ、俺の相棒さ。気にしないでくれ」

誠 「(呆れ)穴戸錠がおまえは……。たく……。(ふと目をドアに移し) —— ニ二」

開いたドア外、廊下の暗がりには黒い影がうずくまり、赤い目がこちらを見ている！

誠 「あわわわわ」

『え？』と見る一同。寝ている美姫も見る。

黒い影、赤い目を光らせて消える。

一同 「わーっ！」

ナカジ、カメラを知らずに向けている。そのカメラ、REC の赤ランプが点滅していた……。

帰り道/夕刻

歩いている一同。みんな、荷物が大きい。

誠 「えっ二」 ナカジさっきの撮ったの二」

ナカジ 「うーん、いちおう。でもさっき、ファインダーで見たらよく判んなかったけど……」

井手「見てえよそれ！ どうかで見ようぜー！」

千葉「どこで？ 誠ンち？」

誠「（曇る）——ウチ、ちつとまずいんだよね。親づるさくつてさ、最近……」

美姫「——じゃあ、ウチ来る？」

一同「『え？』」

美姫「別にいいけど。誰もいないし」

サツと顔を見合わせる男子。

後藤家外観／夜

山手にある高級コンドミニアム

同内／美姫の部屋

広い。あまり女の子らしくないインテリア。部屋の片側には大型テレビ。ゲーセン仕様のコントローラが付いたファミコンやメガドラ、パソコンがガンガンあり、ムキ出しのゲーム基盤（ゲーセン用）が何枚も立て掛けられている。

固まり、呆然と見ている男子。

千葉「——これ、女の部屋かよ」

井手「いわゆる、ゲームヲタクって奴ですか……」

ナカジ「それも、そーとー 濃い 部類の」

誠「（頭を抱え）ゴトミキのイメージが音をたててガラガラと崩れ去る——」

美姫、機械類の裏で配線をゴソゴソやっている。

美姫「座れば？」

四人「（ニッコリ）ハイッ！」

座る四人。部屋にはポテチやチョコが散乱。何故かベっころう飴もある。

千葉「（べっころう飴を手にとって）ゴトミキの主食ってこれか？」

美姫「たぶんこれでへーき。出してみて」

ナカジ「あ、はい」

コードで繋がれた8台ビデオカメラをプレイする。  
画面に廊下の映像が流れる。

カメラに向かって吉本系ギャグをカメラす井手の姿。

井手「いいっしょ？ このギャグ」

白い空気……。

千葉「——（冷徹に）飛ばそう」

井手「『ムツ』」

サーチされる画面。

固唾を呑んで見つめる四人。

ドア外の黒い影、目を光らせているところでポーズ。

美姫除く四人「ぎえーっ」

千葉「——人間、じゃねーよな？ これ」

誠「これって—— テケテケ って奴じゃねえか？」

井手「何だよそれ」

誠「ほら、頭と腕だけで、ものすげえスピードで追っ掛けてくるって」

千葉「それでしまいにや人喰っちゃう奴か」

ナカジ「それって、シヤカシヤカっていうんじゃないの？」

千葉「ウチの学校にも出たかあ……」

---

ゲーム画面。リュウが春麗（チュンリー）にボツコボ  
コにやられている。リュウ、『波動拳』を連発するも  
効かず、遂に墜ちた……。

井手「っ、強ええ……」

対戦相手の美姫、顔色変えず。

美姫「もっぺん、やる？」

井手「お願いしますっ！」

それを背後からぼんやりと見ている三人。

千葉「（小声）そっぴや、聞いた事がある。駅前のゲーセンで  
スッゲーかわいい子が、スト で百人斬りしたって……」

誠「（アハハハ）ゴトミキの事だったのね……」

ナカジ「ねえ、あいつがテケテケだとしたら、古文の浅沼ちゃんが  
詳しいんじゃないかな……」

千葉「なんで？」

ナカジ「だってあいつ、そういう学校の怪談とかさ、ウワサみたいなの、研究してんでしょ？」

千葉「——（誠に）なあ、あのビデオ、テレビとかに売れないじゃないか？」

誠「あんなぼんやりじゃ、駄目だろうな……。」（ヒラメク）  
もつとはつきり映せばいいじゃん——　　そしたらZ  
C1000、買えるじゃん！」

千葉+ナカジ「おお」

誠「そしたら特撮しまくり映画、撮れるじゃん！」

千葉+ナカジ「おお」

誠「そしたら俺は、天才少年監督でデビューだっ！」  
千葉とナカジ、眉を顰めて顔を見合わせる。

千葉「そりゃどーかね」

ナカジ「才能がね」

誠「（美姫に泣きを入れる）美姫さん」

美姫「ん？（べっこう飴をくわえた顔で振り向く）」

誠「（啞然）あ、いえ、なんでも……」

井手「ぎゃーっ、やられたあ！」

振り向きながらも美姫、操作をしていたのだった。

眉をしかめて顔を見合わせる千葉とナカジ。

1年C組教室 / 翌午前

古文教師・浅沼の授業。

黒板の文字

『源氏物語 夕顔の巻』

ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまもおなじやうにてみえければ、荒れたりし所に棲みけん物の、我に見入れけんたよりに、かくなりぬることを思し出づるにも、ゆゆしくなん』

浅沼「——荒んできるところに棲んでたらしい何かが、私に取りつこうとした事を思い出すにつけ、ゾーツとしちまう……。ま、そんな事だな。ここに棲んでたのは、モノノケ、妖怪だな。女の死んだ霊が変化（げ）したものの。（ウヒヒ）

な？ けっこう源氏物語もホラーだろ？」

生徒達、無反応。と、終業のチャイム。

浅沼「(つまらなそうに) んと、じゃ今日はここまでね」

ガヤガヤとした教室。

浅沼、黒板の字を消している。

誠ら四人が近づいてくる。

誠「先生、質問があるんだけど」

浅沼「お、珍しいじゃないか」

廊下

歩いている五人。

浅沼「——なんだよ、そっちの話か……。なに、今度はホラ

ー映画でも撮るんか？」

誠「え、そついう訳じゃ……」

浅沼「(構わず) まあ、確かに有名だよ、テケテケってのは」

井手「やつぱ、いるんすかね」

浅沼「(苦笑) そういう報告が、ウチの研究会にも全国の学校から寄せられてるよ。まあ、どれも似たような話でね。尾鱈がかなりついてるみたいだけど、とにかく最近多くなったな」

誠「——やつぱり……」

千葉「やつぱ、テケテケテケとかいつて走るんだ？」

浅沼「共通してんのは、上半身だけ、もしくは下半身だけ。もの凄いスピードで走るって事だな。この早く走ってのがポイントでね、ある先生は、これは口裂け女のルーツだと解釈してるんだ」

井手「(軽く) じゃ、『ポマード・ポマード』ついたら逃げたりして」

ナカジ「(驚愕) えええっ……あれって『べっこうあめべっこうあめ』って言うんじゃないのおお？ (恐怖) うそーっ」

誠+井手+千葉「ナーカージー(呆れ果て)」

理科室前

やってきた五人。浅沼、立ち止まって中を見る。

浅沼「——これは俺の解釈なんだけどね。テケテケ、もしくはシヤカシヤカ、ま、色んな呼び名はあるんだけど、一種の動物霊じゃないのかな……」

誠「動物？」

浅沼「例えば、実験で死んだ動物、ペットとして死んだ動物、学校にはつきものだからね。それらの霊魂が集合体となって……」

四人「——」

浅沼「あつ、マジでとるんじゃないよ。これは俺の独自の仮説っていうかな。そういう解釈すると筋が通って聞こえるでしょ？ ま、学会でのウケ狙いつてところ（ウヒヒヒ）」

行ってしまう浅沼。

しかし四人は、マに受けている……。

校庭脇／放課後

ゴーン、何故か鐘が鳴る。

井手が破壊した木片を囲んで立っている四人。ナカジはカメラを構えている。

誠「——これ、十年くらい前に飼ってたカメの墓だったよ」

千葉「何で壊すんだよ（井手に）」

井手「知らねーよ。先に教えといてくれよな、そーゆーの」

ふと後ろを見る誠。

美姫がゲームボーイをしている。

井手「あの、今日は撮影、しませんけど……」

美姫「（顔を上げず）いいの。別にヒマだから……」

千葉「ほんとにヒマなんだなあ」

誠「ナカジ、カメラ」

ナカジ、8ビットオを周囲にパンしながら回し始める。

誠「どこにいるんだ……？」

ゲームボーイから目を外し、ぼんやりと校舎の方を見上げる美姫。

美 姫「——あれ？」

ナカジ、カメラを覗きながら近づく。

千 葉「何か映ってるか？」

ナカジ「うんにゃ」

美 姫「(オフ)ねえ」

井 手「(振り向かず)静かにして下さい!」

美 姫「(オフ)あれって、違うの?」

誠 「え?」

誠、美姫の見ている方を見上げる。

誠 「うぎゃっ!」

窓に赤い目が浮かんでいる二

廊下

走り込んでくる一同。

誠 「こつちの窓だ!」

しかし、無人。

見回す一同。

井 手「——どっち行った?」

千 葉「知らねーよ……」

脅えながら進んでいく一同。最後部から美姫も続く。

ナカジ「ねえ」

井 手「何だよ」

ナカジ「いきなりワツとか出てきたら、どうすんの?」

千 葉「そりゃー……」

井 手「こつちだって経験値上がってんだ。ビビッてねえでっか

りビデオに写す!」

誠 「(イヒビ)8目どころか、11目とか買えるかも」

ダンジョンの様な廊下を進んでいくパーティー。

その先の廊下

薄暗い廊下を、恐る恐る進んでいく。

誠 「特撮しまくり映画……」

井手「アクション超大作……」

千葉「弾着バリバリ・ガン・ファイト・バトル・爆破アリアリ・  
血糊ハシバシ……」（狂人がこいつは）」

ナカジ「——ぼくは、青春ほいの、やりたいんだけど」

美姫「——」

スーッ。

誠「？」

何かが床を走り、誠らの前方へと抜ける。灰色の長い

毛モウ

千葉「（泣きそう）なんだよ、あれ」

誠「知るか！」

井手「ザコキャラかあ？」

毛、前方でUターン、再び一同の方へ向かってくる！

呆然と凝視しているばかりの一同。

再び足元を抜け、廊下の果てまで行って停止。

顔を歪めて凝視している一同。ただし美姫だけは、ガ

ムをかみかみ、ひと事のように眺めている。

廊下の向こう、暗い闇となった中に、突如赤い目が爛

々と輝き始める。

誠ら「『ひえ〜〜』」

テケテケテケテケ……。奇怪な音をたてて、目が

近づき始める！

グワオオオ。まるで獣の咆哮！

井手「でたあ！いきなしボスキャラニ」

誠「（必死に）ナカジニ ナカジ撮れっニ」

言いながら必死にライトを点けよつとするも、点灯し  
ない。

ナカジ「うっうっ」

ナカジ、手が震えてスイッチが押せない。

赤い目、フラフラと左右に揺れ始める。

千葉「おい、やばくねえか？」

赤い目、猛然と近づき始める。

テケテケ主観／赤く歪んだ映像。五人に迫る！

(8階)ビデオ+ステディカム?)

---

全員「わああああああああ」

ダッシュ!!

そのまた先の廊下

走る一行。

千葉、走りながらポケットから大型ベレッタを取り出し、オートにセット!

足を止め、振り向きざまにBB弾連射!!

ビシビシビシビシビシビシ!!

と! 赤い目、いきなり後方にテレポルト。

千葉「やったか!!」

---

テケテケ主観。

しかし再び迫り始める赤い目!

---

千葉「(苦笑)チッ」

井手「(オフ)ちばーっ!!」

再び逃走する千葉。

校舎外観

2階の廊下の窓越しに、  
ト、ト、ト、ト、トと逃げ回る一  
人の姿が見える。

階段

下っていく一同。

グラウンド

走り出てくる一同。

皆、ゼーゼー言っている。

誠 「(ハアハア) —— みんな無事かあ？」

一同、互いを見回す。

誠、井手、千葉、美姫……。

井手「おい、ナカジは？」

千葉「！」

と！ 校舎の方から悲鳴

ナカジ「(オフ) ぎゃあああああああ」

誠 「(顔面蒼白) ナカジ！」

暫し硬直してしまっ一同。

しかし、井手、蛮勇を奮って校舎へダッシュ。

続く一同。

### 校舎脇

井手ら「ナカジッ！ 中嶋ッ！」

見探している一同。しかし見当たらない。

と、

誠 「(オフ) おい！ いたぞ！」

### グラウンド整備室

グラウンド競技用の用品庫。その隅に倒れているナカジ。

暗然と見ている一同。

井手「無事か？」

ナカジ「(虚ろに) べっこうあめ…… べっこうあめ……」

誠 「髪が瞬時にして真っ白に変貌している……」

いや、それは単にライン引きの石灰を被っただけなの

だが……。

千葉「ナカジをこんなにしやがって……」

誠ら三人、部屋を後にさっさと帰り始める。

井手「許せねえな！」

誠 「このままじゃ、永遠に学校で撮影出来ない」

千葉「もう勘弁ならねえ！」

その後、美姫がナカジの頭をパンパン叩いて、粉を落としてあげている。行ってしまおう三人。

## 美姫の部屋

CDステレオのパワー、オン！ 軽快なハードロックが流れ始める。

テケテケ討伐の準備が始まった！

自分ちから持ってきたエアガンを並べる千葉。

ホット・プレートで、べっこう飴を溶かしている井手。それを小さな丸薬状にしていくナカジ。

美姫は——べっこう飴くわえつつスト に熱中。『波動拳』の嵐！ 六つボタンとレバーを駆使してリユウを操る。

## 教室／翌日午前

授業中。浅沼、教科書で、寝ている四人の頭を順番に叩いていく。

## グラウンド隅／休み時間

サッカーをやっている生徒達。その隅で、射撃訓練をしている四人。

千葉が手本を示し、SWATのようなアクションで射撃。脇を締め、方膝で狙う。

標的になっているのは、ポンチ絵のテケテケ。

## 屋上

座ってぼんやりとそれを見下ろしている、美姫。手にはゲームボーイ。

(ロックンロール、ここまで)

廊下／放課後

「ごん……。鐘が鳴る。  
薄暗くひと気の無くなった廊下に、5人の勇者が立つ。」

誠 「トラウマ・プロダクション、見参！」

何故か柔道着を着ている井手、戦闘服の千葉と共に先を歩みだす。カメラを持ったナカジ、バッテリーライトを持った誠——ポケットに手をつ込んだ美姫。井手、バッグからダイナマイトの様に導火線を付けた線香の束を取り出し、点火。

ナカジ「手のシワとシワを合わせて——」

井手に後頭部をドツかれるナカジ。  
廊下の奥に向かって放たれる線香

ボワ！ 煙が上がる。

千葉「STAND BY GUYS」

サツと銃を構える一同。

美姫、自分の銃から弾を数個出して掌に転がす。べっ

こつ飴。それをボンと口の中に。

煙が赤く光り始めた。

千葉「有効射程距離10m。引きつけて確実に当てる！」

一同「(頷く)」

煙越しに赤い目が輝く。その光は怒りで一層増したか  
の様。あの、獣の咆哮が空気を震わす。

井手「来るぞーっ！」

左右に揺れ始めるテケテケニ

緊張に顔を引きつらせる誠。

テケテケ、近づき始めた！

千葉「テーツ！」

一斉に銃撃ニ

千葉「うおおおおおニ」

弾、黒い影に当たっているのか判らない。

テケテケ主観。

銃口が一斉に向けられている中へ突っ込んでいく！

美 姫「（毅然と）弱点は目よ！」  
千 葉「！」

千葉、ブラインドで素早くオートからマニュアルに変え、照準を合わせて——撃つ二

テケテケ主観。

琥珀色の弾丸が真っ直ぐ飛んでくる！

テケテケ「ギャアアア！」

——瞬消失するテケテケ。

千 葉「やたっ！」

誠 「——でも、どうして判ったんすか？」

美 姫「（平然と）え？ カン」

千 葉「（振り向き）え？（泣きそう）」

グオオオオオオオ！

ついにテケテケが闇から姿を現す！

醜くシワだらけで、口が耳まで裂けている。そしてその目は禍々しく真紅に輝き、頭の横から嫌らしい形状の腕が生えている！

千 葉「ぎゃあーっ」

テケテケテケテケテケ。嫌らしい音をたて、左右に揺れ始めるテケテケ。

千 葉「助走つけてまたくるぞー」

誠 「（苦渋）奴は精神エネルギーだつ。やっぱり物質的な破壊

は不可能なのか？」

来た二 テケテケが地を滑る様に急速接近して来る二

テケテケ主観。

逃げ出す一同。

——同「わああああああ」

突っ込んでくるテケテケ！

Ｔ字交差になったところで、一同曲がり込む！しかし逃げ遅れた井手、テケテケに髪を掴まれ、前方へ吹っ飛ばされる。

井手「ワアアアア！」

誠「井手！」

井手、受身で堪え、臨戦態勢に。

井手「くそっ！」

井手、テケテケに向かって回し蹴りを連発

唾然と見ている一同。

誠「あのバカ」

井手とテケテケの死闘！ 中小キックを混ぜてテケテケの巨大な足を避けつつ、顔を狙っていく井手。

(テケテケ主観適宜カットバック)

千葉「イデーっ！ 逃げるバカーッ」

その背後、美姫が固唾を呑んで見つめている。その手元——仮想のゲーム卓を操作している様……。

井手、テケテケに足を払われ、地に激突！

井手「てーっ！」

テケテケ、ニタアリ。

井手「くそーっ！ 何で……」

激しくボタンを押す(仕種)美姫。

美姫「(呟く)この敵、カタい(強い)……」

井手「何で死んだ奴の精神が——」

誠「逃げる井手ーっ！」

レバーを激しく振る美姫！



けど、これ」

井手「何だよそれ」

ナカジが持っているのは封筒と手紙。

誠、便箋をとって読み始める。

誠「えーっと……。『ウチの学校には妖怪シヤカシヤカが出てきて困ります。どうか退治しに来てくださいー』?」

千葉「(吐き棄てる様に)バカ言ってるじゃねーよ。誰が——」

井手「もう妖怪退治なんてコリコリだあ」

一同爆笑。わっはっはっは——で、ストップ・モーション。

ナカジ「(オフ/ナカジだけ笑わずに封筒を見ているポーズ)

あれ? これ、女子高からだ……」

グラウンド

風雲吹き荒ぶ校庭を、四人の勇者が出立する。

井手「命に換えても倒してやるぜっ!」

一同「おう!」

屋上

それを見下ろしている美姫。手にはゲームボーイ。

美姫「(無表情に)ばーか」

美姫、ゲームボーイのパワー、オフ。

黒味へカッタアウト。

あの、教室

教師「(カメラを見つめ)—— なアホな……。

(啞然。長い絶句)—— (ハツとし、咳払い)

えーっ、しかしまあ、あの、上半身だけで追っ掛けてくる妖怪、全国の学校に出没しているそうですな。

カリカリばあとか、パタパタとか、呼び名は色々ある様です。いずれにしても、あなたの学校に、

いつ現れるか判りませんよ。その時は、あの連中を呼んで退治して貰うのも手ですな。ヒヒヒ」  
と！ 突如、教師を写しているカメラの映像、赤く染まる。

教師「なっ」 何やねんな」

カメラ、教師に向かって突進していく。

教師「ギャアアアアアアアッ」

終